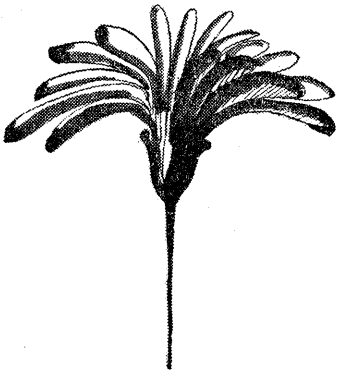

私は児童文学、児童書と呼ばれるものを、「子ども達に読んであげる」ためには決して読むことはありません。いつも自分の楽しみで読みます。けれども心楽しい絵本やお話に出会いますと、子ども達にすぐに話してあげたい気持になります。この本もそんな気持にさせた一冊です。子ども達に話してあげるには少しむつかしいかもしれませんけれど。

藤本美穂子

「ヴァイオリン」　R・T・アレン　文
G・パスティック　写真
評論社

私の育った若狭の街には二本の美しい川が流れています。そのせいか、水のある風景に出会いますと、とてもなつかしい気持になり、ごく自然にバロックのあのなつかしい旋律があわせて思いうかびま

す。この絵本も、水のある風景が舞台で、音楽が関わっています。そして仲の良い二人の少年と、老ヴァイオリニストのお話です。

少年のひとりはお母さんに連れられていったコンサートで、自分よりも年下の少年が弾いたヴァイオリンの音色が忘れられなくて、秘かにヴァイオリンを手に入れようとお金をためています。小銭をためるびんがとうとういっぱいになった日、少年は友達と目ざす店に行きますが欲しいヴァイオリンは高価すぎて手にあいません。店の主人は古びたヴァイオリンをさがし出してこれならとわけてくれます。でも欲しいと思っていたものとは随分ちがいます。弾いてみても耳をおさえたくなるような音しか出ません。少年はこのヴァイオリンを公園のくずかごの中に捨ててしまいます。そこへ老人がやってきてヴァイオリンを見つけて弾き出します。そのメロディや音色の何と美しいことか。ヴァイオリンを持ち帰ろうとする老人に、二人の少年は訳を話して返してくれるように頼みます。老人はヴァイオリンを磨き調弦することを約そくします。老人は「……気持がよくて親しみやすくほんのちょっとだらしない家……」にうさぎ一わ、鳩一わと暮らしています。

老人はそれから少年にヴァイオリンを教え始めるのです。少年は音楽を知っていくと同時に老人を理解していきます。

ある日少年達は橋の上でひとりはヴァイオリンに、ひとりは魚釣りに興じています。釣糸が引くのを見て、少年はヴァイオリンを投げだし友達が釣り上げるのを手伝おうとします。けれども年下の少年は自分の力だけで釣り上げたかったために少年を押しのけます。その拍子に少年は自分のヴァイオリンの上に倒れヴァイオリンは無気味な音をたてるのです。沈みこんでしまった少年を助けることのできるのは老人だけだと、老人に友達は助けを求めます。老人の家のドアには張り紙がしてあり、全部を読み

取ることはできませんが、老人がいなくなるらしいということを察します。大きなスーツケースを持ち、鳩のかごを体につるして出かけつつある老人を見つけて、友達の小さな少年は訳を話します。老人は考え考え少年の座りこんでいる橋の階段をのぼってきます。そして老人は何よりも大切にしているヴァイオリンを橋の階段の下において立ち去るのです。

友達からドアに張られていた手紙を見せられ、老人が行ってしまうことを知った少年は老人の後を追います。けれども老人はすでにボートにうさぎと鳩をのせ、ピンクのかさで日陰を作ってやりながら、もう声の届かないところまでこぎ出していたのです。少年は老人に心を届かせることのできるのはヴァイオリンしかないと、一度はもう決して弾くまいと思ったヴァイオリンを、そして初めてのヴァイオリンを心をこめて弾くのです。

この本を読んで興味深く思えることがいくつかあります。その一つはこれは絵本なのですが、絵ではなく写真が使われているということです。二人の少年も老人も、ヴァイオリンもピンクのかさも、小銭のつまったびんもみんな写真なのです。この写真がとてもよく、少年や老人の気持を語っています。悲痛な思い、あたたかさ、やさしさ、又激しさを。

例えばヴァイオリンがこわれてしまった後、少年は「……『ぼくはこれっきり、もうヴァイオリンを弾かない』といってそれ以上一言だってしゃべろうとしなかった……」という一節がありますが、私は写真を見ないで言葉を読んだ時、とても投げやりな怒りの勝った言葉として読みとったのですが、写真を見て、それは決して怒りではなく、言葉では語れない程の悲しみのこもったつぶやくような言葉であると理解できたのです。

又最後の場面で、波打際から少年は心をこめてヴァイオリンを弾きます。次の頁は哀しみのある、そ

れでいて顔中をほころばせている老人の大きな顔写真です。これがあることで私はどんなに慰められたことでしょう。

他にも美しい写真がたくさんあります。

通りに面したウィンドウに飾られているヴァイオリン。……とりたての栗の実のようにつやつや光っているヴァイオリン……

雪の舞う中で少年達は老人のかなでる音色に聴き入っています。……ふりしきる雪のなかに舞いあがってゆくメロディ……

どうぞ言葉を読みながら、丁寧に写真をごらんになって下さい。言葉のもつひろがりを写真は充分にうけとめて、それに応えてくれています。

しかし私がこの本で一番心魅かれたのは、老人の生き方についてなのです。

音楽を愛したために、老人の過去には不本意なことがあったかもしれない、だからこそ老人が少年にかける期待や希望には、はかり知れない夢があったはずなのです。けれども少年がヴァイオリンに夢中になり出したその時に老人は身をひくのです。私はそこに深く心動かされるのです。

老人は少年と出会ったその時に、同じ世界に住み、同質のものに愛を寄せる心の通いあう相手であると理解したはずです。そしてヴァイオリンの手ほどきをすることは老人にとっては何よりの慰めであり、楽しみであり、生きがいであったにちがいありません。老人はしかし、音楽を知る故に、自由の意味を理解するが故に、子どもを深く愛するが故に身をひくのです。この少年に無意識のうちに、自分の願いを押しつけることになりはしないかと恐れたのです。老人は少年達に気づかれないままにそっと立ち去ることを願っていたのですが、思いがけない事件のために、老人は自分のしようとすることに、より明らかな選択をせまられるのです。つまり自分の分身のように大切にしてきたヴァイオリンを少年に手わたすこと以外に少年の傷ついた心を救う方法は

ない。けれどもこのヴァイオリンを老人がどんな思いで大切にしてきたかを少年が知っているだけに、これを手わたすことは少年に恐れている生き方の押しつけになるのではないかと。

『ほら、これからはこれが君のものだ。わしは別のを手に入れるさ、いつか。だが君がヴァイオリンを続けるかどうか、まして立派な演奏家になるため一生懸命練習するかどうかきめるのはクリス、君自身だ』

人生を先きに歩んでいるというだけに、体験や経験が豊かであるということで、子どもに対した時、おとなである私達は何かと教え導こうとします。おとなが善かれと思って行為するなかで、子どもに実はおしつけになっていないことがあるでしょうか。おとなが子どものためにしてあげることがはたしてあるのでしょうか。

私はこの疑問にこの本を通して出会えたことをとても幸わせに思います。抑圧のない、限りなく自由な中で子ども達には自分の生き方を、自分で選びとって欲しいと願ってはいますが老人のような生き方が、はたして私にできるでしょうか。

（大阪市長居幼稚園）

◇

◇

◇